秋田孝季の妹である和田りくの筆跡について

西坂久和

和田家文書をスキャン・データ化し、ホームページで発表する作業を進めている。寛政年間筆写と思われる「荒木武芸帳」をお借りしてデータ化させていただいたところ、その本文部分が「真実の東北王朝」で紹介されている、りく自筆署名のある「天草軍記」と同一筆跡であることがわかったので報告する。

１，古田先生の方法または見解

古田先生が、和田家文書とのかかわりを持ち始められたころの活動について述べられた、駸々堂出版「真実の東北王朝」(1990)より

『三人の協同作業

孝季の学問の真骨頂、それは「書写」の二字にあった。伝承や発掘物や各地の記録を、みずからの手で「再写」して「保存」する。　―　この作業だった。

ここで「みずから」とは、三人だ。一人は、当然孝季本人。もう一人は、彼のスポンサーともなった、旧家、和田家の若き当主、和田長三郎吉次(よしつぐ）である。生涯、孝季に師事し、経済的にも、孝季を支えた。ちょうど、あのマルクスを生涯支えた、中流の資本家、エンゲルスに当る役割を果たしたようである。

もう一人、忘れてならない女性がいる。りくだ。孝季の妹にして、長三郎吉次の妻となった。二人を結ぶ「生きた、かすがい」だったのである。

しかもただ、「かすがい」にとどまったのではなかった。彼等の「書写」作業の秘密兵器、それがりくの役割だったように、わたしには思われる。(中略)

「天草軍記」(りく書写本）の達者な、慣れた筆致、それが何よりも雄弁に物語っていたのであった。』

２，「荒木武芸帳」のデータスキャン

２００６(平成１８)年、孝季自身が寛政年間に筆写と思われる写本類が、竹田様より古田先生に届けられた。そのうちの、「荒木武芸帳」をお借りしてデータ化させていただいた

ところ、その本文部分が「真実の東北王朝」で紹介されている、りく自筆署名のある「天草軍記」と同一筆跡であることがわかった。

３,「真実の東北王朝」紹介の「天草軍記」のデータスキャン

「真実の東北王朝」で紹介されている「天草軍記」が、現在何処にあるか不明だった。

そこで、管理なさっていらっしゃる竹田様に探していただき、無事存在が確認された。「天草軍記」を、お借りして、データ化作業できた。

「荒木武芸帳」・「天草軍記」ともにホームページでの公開作業中です。

４，寛政原本が見つかった後の古田先生によるまとめ

古田史学論集第十一集(2008)より

・わたし(古田先生)は青森における講演において、講演終了後、控室において一人の中年紳士の訪問を受けた。

「東日流外三郡誌の研究をしていただきたいのです。」

「しかし、わたしは活字本でなく、原本を見ないと、研究できません。」

「原本をお見せいたします。」

これが、藤本光幸氏との、最初の会話だったのである。今、考えてみると、この会話は「示唆的」だった。

今から思うと、それらの中にはすでに今回の「寛政原本」がふくまれていた可能性がある。けれど、その区別は藤本氏の頭にはなく、「活字でないもの」「紙に筆で書かれているもの」それを「原本」と呼んでおられたのである。

和田家文書（竹田侑子さん蔵）の中で「秋田孝季・自筆」と見られるものを、次にあげてみよう。

・「護国女太平記巻之十」「孝季記」

冒頭から末尾まで同一筆跡。全文が孝季の「書写」の形である。

・「荒木武芸帳　秋田孝季」「安永乙未年月日　秋田孝季（花押)」

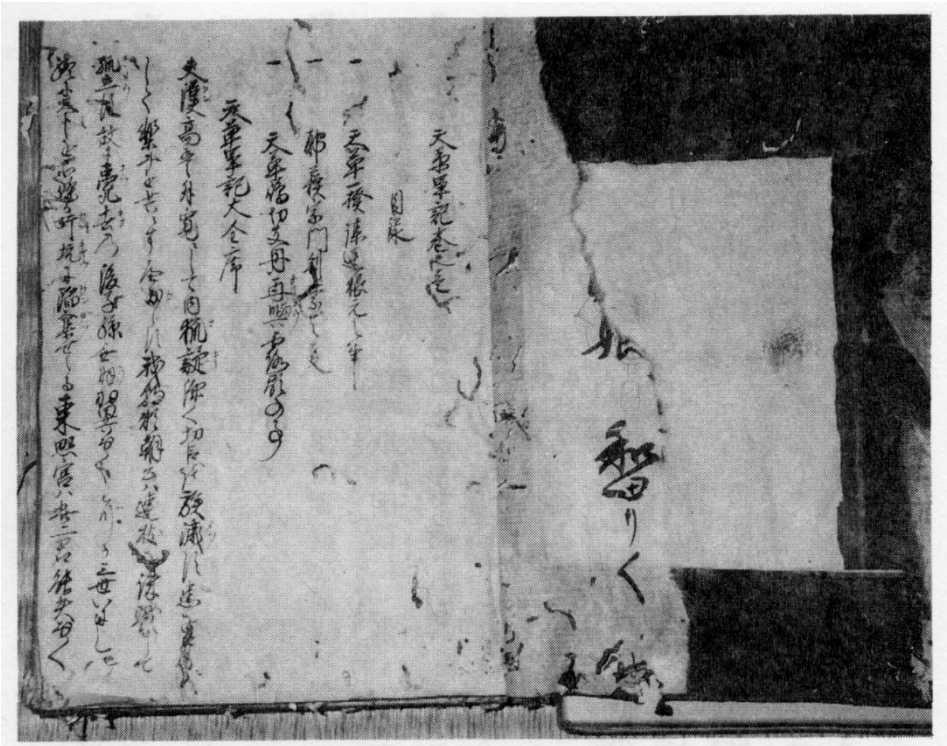
これが秋田孝季による「所有のサイン」であることは、まちがいない。あるいは自然の理解である。けれども、この本文そのものが孝季の書写であるか否かこれは今後の課題で

ある。ただこれが「安永乙未年（四年、一七七五）という年時が示されていることが貴重である。

５，スキャン作業の結果(西坂による感想)

・石塔山印は、駸々堂出版「真実の東北王朝」刊行後に和田喜八郎氏により捺印されたものと思われる。

・秋田家の扇印は、「真実の東北王朝」刊行前に捺印されていたと思われる。



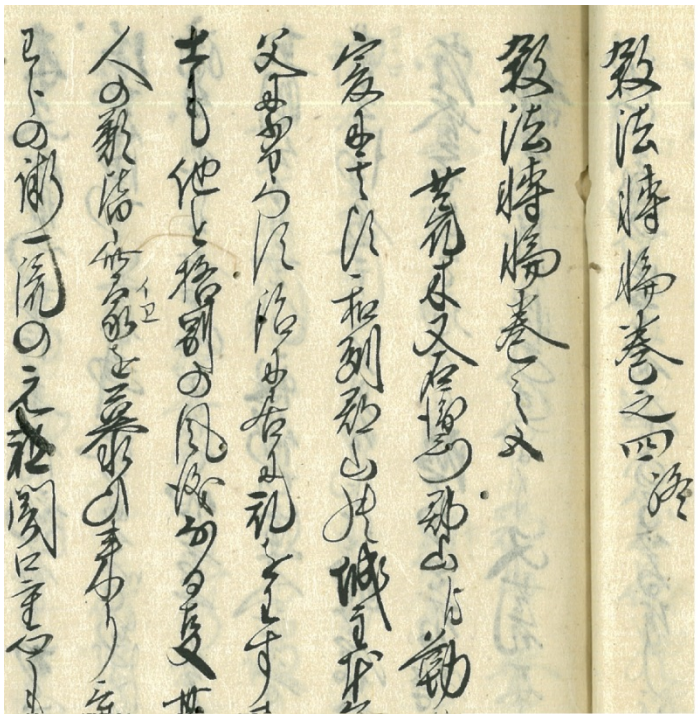
和田りくが書写した『天草軍記』（第１巻）

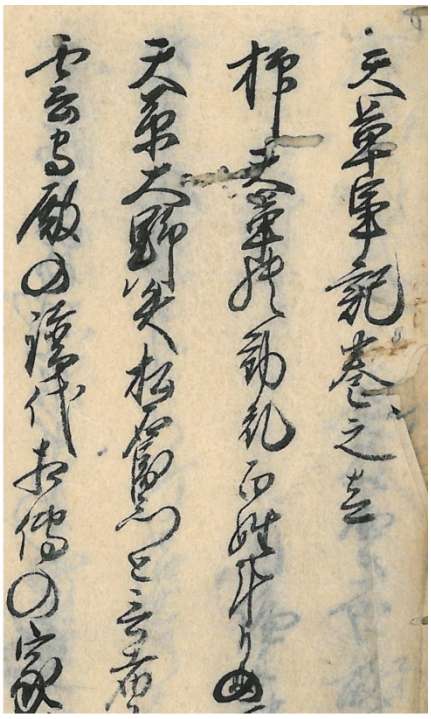
「真実の東北王朝」（１９９０年出版）紹介の「天草軍記」の状態

２０１８（平成３０）年６月現在の「天草軍記」

「護国女太平記巻之十」　孝季署名は最後の部分にある（次頁）

「荒木武芸帳　秋田孝季」　「安永乙未年月日　秋田孝季（花押）」（次頁）





左：荒木武芸帳　　右：天草軍記

左端より

荒木武芸帳　護国女太平記巻之十　東日流内三郡誌第一巻　安倍小太郎康季　道中慰読書